

和歌陀羅尼の説

——狂言綺語観の展開(4)——

中川徳之助

はじめに

前稿に、沙石集の成立時期(二二八三・以後の訂正加筆あり。)

を下限として資料をあげ、当時の歌人における狂言綺語観の滲透と展開との様相について考えた。本稿では沙石集の著者無住一円(一二二六——一三二二)の和歌陀羅尼説について考える。無住の和歌

鏡は、論としてのまとまりに欠けるが、主として沙石集——とくに巻五「和歌の道深き理ある事」を中心に記されている。いま、「立言」「背景」の二章を分つて考える。

沙石集には広略二系統の諸本が存する。本稿では岩波文庫本（略本系統・貞享三年板本）による。渡辺綱也氏校訂の広本沙石集（米沢図書館藏・古鈔十二帖本）を参照する場合は「広本」と注す。雑談集・聖財集・妻鏡の引用は、印刷の便宜上、訓み下し体に改む。

I 立言

和歌の一道を思ひ解くに、散乱驚動の心をやめ、寂然閑静の徳あり。又言すくなくして心を含めり。惣持の義あるべし。惣持といふは即ち陀羅尼也。

沙石集卷五

世間出世の道理を三十一字の中につつみて、仏菩薩の応もあり、神明人類の感もあり。かの陀羅尼も、天竺の世俗の言なれども、陀羅尼にもちひて是をたもてば、滅罪の徳抜苦の用あり。日本の和歌も、よのつねのことばなれども、和歌に用ひて思ひをのぶれば、必ず感あり。まして仏法の心をふくめらんは、疑なく陀羅尼なるべし。

全上

和歌を真言と心えて侍る事、聖人は心なし。万人の心を心とすと云へり。然れば法身は言なし。万人の言をもて語として、仏法をとき給ふ。言の中に義理を含めば、必ず惣持なり。惣持ならば必ず真言なるべし。天竺漢土和国、その詞ことなれども其心通じて、其益すでに同じき故に、仏教弘まりて、其義門をえて利益虚しからず。

全上

詞に定れる準なし。只心を得て思ひをのべば、必ず感応有るべし。大聖我国に顕れて、既に和歌を詠じ給ふ。清水の御詠にも、

唯たのめしめぢが原のさしも草われ世の中にあらんかぎりはとあり。是必ず陀羅尼なるべし。疑ふ可からず。神明又多く歌を感じて人の望みを叶へしめ給ふ。かたがた和歌の徳、惣持の義、陀羅尼一心うべし。

全上

和歌の陀羅尼に似たる事、惣持の道理也。ただも思ふ程祈念しけんに、感なくして、和歌にめでて利生あり。陀羅尼も常のことばなれども、ただのことばに益なし。陀羅尼は、なずらふれば仏の和歌也。

全上

仏の義理を含て陀羅尼につらね給へり。歌の如し。如何其徳なからん。

内閣文庫本沙石集卷五

体として心（義理）を含み、用として寂然閑静の徳、感応の徳を有する。これが、和歌の陀羅尼とされる所以である。体としての心（義理）はどのような性格であるか。

凡そ狂言綺語と云ひて、言葉の過に和歌を入る事は、染歌と云ひて愛情にひかれて、由なき色にそみ、むなしき詞をかざる故なり。聖教の理をものべ、無常の心をもつらねて、世縁俗念をうすくし、名利情執も忘れ、風花を見て世上のあだなる事を知り、雪月を詠じて、心中の深き理をもさたらば、仏道に入る媒、法門を悟る便りなるべし。

沙石集卷五

和歌を綺語といへる事は、由なきことをいへるなるを、或は染汗心によりて、思はぬ事をいへるは実に失なるべし。離別哀傷の思ひ切なるに付きて、心の中の思ひをありのままに云ひの

べて万縁をわすれ、此一事に心すみ思ひ静かなれば、道に入る
方便なるべし。

全上

すなわち、言うところの心（義理）が仏教的にきわめて規制され
た心（義理）であることは明らかである。規制された心（義理）を
体とする和歌のみが陀羅尼とされる。清水観世音の詠歌がその一証
である。

和歌陀羅尼説において、和歌がきわめて規制されたものであるこ
とを述べたが、如上の体と用とが常に疎密に適用されたかどうかは
疑わしい。説の頂点ではきわめて限定された和歌を考へていたにせ
よ、説の底辺ではかなり寛容な和歌詠客が存したのではなからう
か。この推定の理由は後述する。

陀羅尼は漢訳して惣持、總持また能持。大智度論に「陀羅尼秦言
能持。或言能遮。能持者。集種種善法。能持令不散不失。譬如完器
盛水。水不漏散。能遮者。惡不善根心生。能遮令不生。若欲作惡
罪。持令不作。是名四羅尼。」（卷五）とある。瑜伽師地論には

「当知如是妙陀羅尼略有四種。一者法陀羅尼。二者義陀羅尼。三者
呪陀羅尼。四者能得菩薩忍陀羅尼。」（卷四五）、菩薩地持經には
「云何菩薩陀羅尼。略説四種。一者法陀羅尼。二者義陀羅尼。三者
呪術陀羅尼。四者得菩薩忍陀羅尼。」（卷八）とあるが、その呪陀
羅尼を真言密教では単に陀羅尼と言ひ、仏菩薩の禪定より発する秘
密の言句として尊ぶ。真言陀羅尼宗である。呪陀羅尼については、

「云何菩薩呪陀羅尼。謂諸菩薩獲得如是等持自在。由此自在加被。能
除有情災患。諸呪章句。令彼章句悉皆神驗。第一神驗無所唐捐。能
除非一種種災患。是名菩薩呪陀羅尼。」（瑜伽師地論）、「云何呪術
陀羅尼。菩薩得如是三昧力。以呪術章句。為衆除患。第一神驗。種

種災患悉令消滅。」（菩薩地持經）、また「菩薩依禪能起呪術為衆
除患。第一神驗名呪術陀羅尼。」（大乘義章卷十一）とある。聖財
集に、

仍ツテ一ノ陀羅尼ノ文字音声不思議ノ幻金剛ノ用法界ヲ全クセ
ル駄用無碍ノ法門也。

卷中

古徳ノ云ハク。陀羅尼ニ三有リ。多字一字無字也。無宗ハ巴覓無
相ノ理也。巴覓無ニ云フ。大陀羅尼門有リ。名ヅケテ巴覓ト為ス
ト云ヘリ。真如ノ理知トモ云ヘリ。此ハ理秘密ナルベシ。一字ハ
諸尊ノ種子等也。多字ハ仏頂尊勝等ノ陀羅尼也。

卷下

陀羅尼ノ章句音声等魔界ノ障礙ヲ払ヒ消ス事モ此レ不思議ノ徳
用也。忽ニスベカラザルモノ歟。

卷下

雑談集に、

陀羅尼ノ功能ニテ靈病ノイエタル事、愚老ガ覺ヘ侍ヘリ。当代彼
ノ人存セリ。陀羅尼ノ功能ハ末代コトニ勝レテメデタカルベキヨ
シ真言經ノ中之多シ。大般若ノ中ニ理趣分ハコトニ理趣經ト同躰
異訳也。陀羅尼ノ功能メデタク見ヘタリ。惣持猶妙藥能療治惑病
亦如天甘露服者常安樂

卷六

ヨツテ彼ノ陀羅尼、名号所説ノ經文、コレヲ聞キテ、心ナキ煩惱
罪障ナリトモ、イカテカ消エザラム。

卷十

などとあるのをはじめ、沙石集の用語を見ても、無住の言う陀羅尼
は真言密教に言うところの陀羅尼の謂とみてよからう。

Ⅱ 背景

和歌陀羅尼の背景、すなわち、上述の立言を導いた要因を考え
る。

(1) 狂言綺語観

和歌陀羅尼説は狂言綺語観を前提とする。

夫鹿言歌語みな第一義に帰し、治生産業しかしながら実相にそむかず。然れば狂言綺語のあだなる戯を縁として、仏乗の妙なる道に入れ、世間浅近の賤しき事を譬として、勝義の深き理を知らしめんと思ふ。

沙石集序

此ノ雑談集或ル同法ノ所望ニヨリテ手ニマカセテ之ヲ記ス。(中略)ヨク用フル時ハ狂言綺語ノ誤猶転ジテ説仏乗ノ因転法輪ノ縁トスル事ナリ。

雑談集卷八

智人ハ業即解脱ト云ヒテ善惡不二ノ謂ヲ覺リ顯シテ迷悟一軌ノ理ヲ覺リヌレバ一色一番中道ニ非ズト云事ナシ。狂言綺語ノ誤マデモ転法輪ノ縁ト成ルベシ。

要鏡

に見るような狂言綺語観をふまえ、和歌を狂言綺語とは見ないところ、和歌陀羅尼説が生まれる。しかして、狂言綺語観の展開を辿ると、無住の論の成立も偶然でない。寂然の法門百首に「鹿言歌語みな第一義に帰して、一法としても実相の理にそむくべからず。いはんやこの卅一字のふでのあと、ひとへに世俗文字のたはぶれにあらざ。ことごとく権実の教文をもてあそぶなり。」後鳥羽院御自歌合法文二首の判詞に「法性の空念来清浄なれども、妄想の雲おほひぬれば正因仏性ありともしらず。このことわりをしらでは仏になることかたし。一即一微塵の中に法界悉くをさまる。况卅一字のあひだに実相のことわりきはまれり。」とあるごとき、和歌陀羅尼説といくばくの距りがある。 「陀羅尼」と言いきる点に仏道への接積度の高さはあるが。

我朝の神明は、多くは仏菩薩の垂跡心身の随一なり。素蓋鳴尊す

でに出雲八重がきの三十一字の詠を始め給へり。仏の語にことなるべからず。天竺の陀羅尼も、ただ其国の人のことばなり。仏是をもて、陀羅尼を説き給へり。この故に、一行禪師の大日經の疏にも、随方の詞は、みな陀羅尼といへり。仏若しわが國に出で給はば、ただ和国のことばを以て陀羅尼としたまふべし。惣持は本文字なし。文字惣持をあらはず。何れの國の文字か惣持をあらはず徳なからん。

沙石集卷五

「神々とのつながりの意識」の継承と、「和歌は和国の風俗」という固有性の確認、狂言綺語観の流れにある証左である。本地垂迹思想は無住の著作にいちじるしい。

(2) 三教合一思想

聖財集卷上「外典内典四句事」に、

外典ハ孔子老子ノ教釈教ニ対シテ是ヲ三教ト云ヘリ。孔子ハ儒童菩薩老子ハ迦葉菩薩ノ垂跡也。起世 經文 儒教ハ先王ノ至徳要道孝順仁義等ノ教ハ戒学ノ方便也。老子ノ虚無ノ大道坐亡ノ行儀禪門坐禪ノ方便也。仏法ノ弘通機根ノ調熟実ニ難シ。本師釈尊方便シテ御弟子ヲ先ヅ漢土ニ遣ハシテ後ニ時至ツテ漢ノ明帝ノ代ニ至ツテ迦竺始テ仏經ヲ伝ヘタリ。一説ニハ我遣三聖ト云ヒテ三人也。顔回ヲ加ヘタリ。外典ノ方便ナクハ釈教タヤスク悟リガタシ。

権ト云フハ孔老ノ教小乘大乘等ノ不了義也。実トハ一乘巴教禪門密教也。両単ニハ実ヲ知りテ権ヲ学バザル勝ルベシ。俱ニ学スル尤勝リタリ。

西天ノ三乘ノ教漢土ノ儒道ノ二教日本ノ神明皆方便ノ権跡実教ノ基本也。

実ニ外典ノ權教神明ノ方便ナクハ実教本地ノ利益ハアラハレ難カルベシ。方便權実躰一ニシテ本跡源ト同ジケレバ其ノ道理分明也。

と三教合一思想が述べられている。また、

漢朝には仏法を弘めんために、儒童、迦葉、定光の三人の菩薩、孔子、老子、顔回とて、まづ外典をもて人の心を和けて、後に仏法流布せしかば、人皆此を信じき。我朝には和光の神明まづ跡をたれて、人のあらしき心をやはらげて、仏法を信ずる方便とし給へり。

沙石集卷一

古徳の云はく、仏法はたやすく流布しがたし。仍つて天竺の菩薩、漢土へむまれて、先づ外典をひろめて、父母の神識有る事をしらしめ、孝養の志を教へて仏法の方便とすと云へり。全上孔丘は儒童菩薩の後身として、周の代に出でて、仏法の方便のために、先王の要道をもつて国の政を示し、仁義の孝行ををしへて、人の心をただしくせし賢聖なり。

沙石集卷三

古人ノ意詞多クハ大權ノ垂迹ノ故仏法ノ旨ヲ含メリ。忽緒ニスベカラズ。孔子ノ五常ハ仮諦戒門ノ方便也。老子ノ虚無ハ真諦禪ノ方便也。莊子ハ実相中道ノ方便也。自然ノ道理ヲ示スト云ヘリ。アツク心得バ自然ノ見ニラツ。ヨク心得バ佛法如如ナル一如平等ノ理ヲ悟リヌベシ。

雑談集卷五

など、沙石集、雑談集に流れる思想である。三教合一思想は中華より伝えたもの、とくに宋の三教合一思想を伝えたのは巴爾弁円である。無住は師説を継承している。ここでは上例に見るように「方便」の語が重要な意義を有する。「方便」の語に照射されて、つぎに掲げる言のように、和歌は仏道につながる。

仏法に入る方便まぢまぢなれども、唯一を得るにあり。事には一心をえ、理には一性を覚る。此故に、華嚴には三界唯一心と云ひ、法華には唯一仏乗と説き、起信論には一心法界と云ひ、天台には唯一実相と談じ、毘尼には常爾一心と云ひ、浄土門には一心不乱と云ひ、宗門には一心不生と云ひ、密教には唯一金剛と説く。然れば流転生死は、一理に背きて差別の諸法を執するにより、寂滅涅槃は万縁をすてて、平等の一理に叶へるにあり。然るに一心を得る初の浅き方便、和歌にしくはなし。

沙石集卷五

阿字と云ふは本不生の義也。文字を伝ふるにあらず。唯心不生なるこれ阿字なり。密宗の大意是にあり。誠に心地に染汙なく分別なくば、阿字を心得べし。一念不生の心即ち阿字也。此故にあさき方便をとりよりにせんとて、和歌をすすめ申しけるにや。誠に塵勞の苦しき域を忘れ、解脱の妙なる境に入る方便、和歌の一道勝れ侍り。我国に跡をたれ給へる權化先徳、昔より翫ひ給ふ事も此故にや。

全上

上掲の「離別哀傷の思ひ切なるに付きて、心の中の思ひをありのままに云ひのべて万縁をわすれ、此一事に心すみ思ひ静かなれば、這に入る方便なるべし。」(沙石集卷五)も然り。方便観と陀羅尼観とその考え方にずれがあるが、三教合一思想が無住の和歌観を育てていることは否めない。三教合一思想は、また、和歌陀羅尼説の底辺における寛容な和歌認容を推定させる一の因である。

無住の文学的嗜好について一言する。

愚老モ昔ヨリ物語ヲ愛シ好ミ侍シ故ニ、修行ノイトマヲカキテ、徒ヲ専ラカキヲキ侍ル、身ナガラモ此辭ヤマザル故也。

「雑談の次に教門をひらき、戯論の中に解行を示す。」(沙石集序)とも、「此物語雑談トイヘドモ多クハ是レ述懐也。」(雑談集巻一)とも述べているが、所詮、こうした述作は宗教者本来の生き方に副うものではない。そこに、無住の文学的嗜好を見るのである。

樂天がいはい、人皆有一癖。我癖在草句と云ひて、世間の事方縁をすてて、仏道に入りて後も、文章を好み愛する癖の捨てがたき事をいへるなり。人ごとに、心の中にも身の業にも、愛し好んですて難く忘れ難き事あり。此を癖といふ。沙石集巻四一文はそのまま身に反ることばであつたらう。雑談集には述懐の歌が多い。多くは道歌と言ふべきもの、巧拙を問うべき性質のものではない。中に、藤・鞭・桐・火桶・頼政の語を隠し詠んだ「五月雨ニセセノフチフチヲチタギリヒラケサイカニヨリマサルラン」の歌(この歌は無住の作と考えられる。八十四才の時である。)、また「世ノ中ノ濁リニシマヌ心モテ蓮ノ華ノ寺ニスムカナ」「聞ヤイカニ妻ヨブ鹿ノ音マデモ皆身與相不相違背ト」のごとく古歌をふまえての作もある。沙石集には和歌の造詣をうかがわせる説話も多い。

無住に内在する文学的嗜好は、三教合一思想と相俟つて、和歌陀羅尼説の支えとなつている。また、和歌陀羅尼説の底辺における寛容な和歌認容を推定させる二の因である。

(3) 教禪一致思想——真言密教

無住は巴爾弁円の法を受け、晩年に尾州長母寺に教化した禪僧であるが、思想的遍歴の多彩は聖財集にも明らかである。

資道二十八歳ノ時遁世ノ門ニ入テ律学六七七ニ及ブ。四十餘ノ歳マデ随分ニ持齋梵行退転無ク侍リシガ病縁ニ事ヲ寄セ憊怠ノ

心自然ニ正牀無クシテ薬酒晩食之ヲ用ユ。

雑談集巻三

愚老律学ノ事五六年。定恵ノ学顕学密教ヲ欣慕シ禪門ヲ開ク。晩学ノ故ニ何ノ宗其ノ意ヲ得ズ。然レドモ大綱之ヲ開ク。此ノ因縁ニ依リ三学ノ諸宗同ジク信シ別シテ宗鏡録禪教和会偏執無シ。

全巻一

本来疎略愚鈍晩学ノ故何ノ宗モ其ノ旨ヲ得ズ。只大綱之ヲ開ケリ。

全巻三

愚僧ガ如ナル朦昧ノ族ナマジニ髪ヲ剃リ衣ヲ染メタルヲ以テ僧ノ名ヲ借リタレドモ大小乗ノ律儀中一戒ヲモ守ラズ。樞衷二教ノ中ニ一宗ヲモ学ビズ。(中略)行学ニ携リテ修行セズ。内証外用ノ功德モ欠ケタリ。然レバ僧ニモ非ズ俗ニモ非ズ。妻鏡本より田舎の山里に生長て、文章もくらく歌道にもうとく、仏法は又一宗をもまことしく学せず。ひたそらの山がついて侍れば、かたはらいたく、かたくななる事多くこそ侍れ。

沙石集巻十

一宗に拘らぬ無住の面目が知られる。そして、教禪一致思想の裏づけがある。本朝高僧依の賛に「月船。癡元。無住三師。本精于台密之教。大抵経論家者。嫌毀禅法。然三師入宗門。定有因縁之有焉。云云」とある。教禪一致の思想は巴爾弁円の禪風に顯著である。「顯密禪教ノ大綱心肝ニ銘ジ識藏ニ薫ズ。併開山ノ恩徳也。」

(雑談集巻三)「故東福寺の長老、聖一和尚の法門談議の座のすゑ

に、そのかみのぞみて、時時聴聞する事侍りしに、顯密禪教の大綱誠にめでたく聞え侍りき。」(沙石集巻三)ともある。聖財集巻下に「故東福寺ノ法門ノ大牀宗鏡ノ義勢也。」とあるのもこの故である。

禪教の差別は方便の位にあり。史証の所はことなるべからざる
と見えたり。故に古徳の云はく、教は仏の言禪は仏の心、諸仏
は心口相応すと云へり。

沙石集卷五

然れども禪と教と、方便を尋ねれば隔たりて同すべからず。証
理を論ぜばへだてて異すべからず。

全上

機をひく方便は異なりといへども、道をさとる真理、理何ぞ異
ならん。宋代偏学の聲、偏執わすれぬにこそ。大乘の心は、煩
悩と菩提と猶し相即せり。禪門と教門と何ぞ與に隔あらん。

全上

教と禪とは父母の如し。禪は父、教は母なり。(中略) 禪教相
資けて仏法はめでたかる。

全上

また、沙石集卷四「無言上人の事」をはじめ、教禪一致の思想は
無住の言説の端端にみられる。聖財集卷下「禪教四句事」も参照さ
れる。教禪の峻別に急でない禪風は、三教合一思想とともに、和歌
陀羅尼説をひきだす力となつてゐる。また、和歌陀羅尼説の底辺に
おける寛容な和歌認容を推定させる三の因である。

教宗では真言密教が重んじられてゐる。

此ノ法是諸宗ノ最頂方法ノ惣躰生仏一如ノ根本事理俱密ノ秘法
也。舌相ノ言語ハ皆是真言身相ノ挙動ハ皆是密印所有ノ心相ハ
自ラ三階地ト云ヘリ。此ノ意ヲ能々悟リ踊スヲ真言ノ秘観ト
ス。是レ余宗ニ闕ケテ書サザル所也。諸宗ハ皆釈迦化ノ説
也。真言ハ大日如来自性法身ノ説也。

妻鏡

マシテ禪門真言隔テハテンヤ。少々義門ハタガフトモ隔テジト

コソ覚エ侍レ。

聖財集

など、真言密教推重の態度が示される。

陀羅尼については述べたが、和歌陀羅尼説と真言密教とは深い
つながりが考えられる。狂言綺語観における真言の論理の介入につ
いては、山田昭全氏が指摘されている。

況や高野大師も、五大皆響あり。六塵ごとごとく文字也と宣べ
り。五音をいでたる音なし。阿字をはなれたる詞なし。阿字即
ち密教の根本なり。されば経にも、舌相言語みな真言といへり
大日経の三十一品もおのづから三十一字にあたり。

沙石集卷五

真言密教の習ひには、法爾所起曼荼羅縁上下迷悟転と云ひて
六大法界四種曼荼羅なり。依報をいへば寂光を出でず。正報をた
づぬれば毘盧遮那仏也、ただおのれとまよへば、衆生となりて下
下来来し、無明の海に入る。自己をさとれば、上上去去として仏
果にのぼる。法は本来曼荼羅なり。このころを思ひつづけ侍り
おのづからやけ野にたてる薄までまんだらとこそ人もいふな
れ

沙石集卷五

ソラヤ水水ヤソラトモオボホヘズカヨヒテスメル秋ノ夜ノ月
(中略) 此歌ハ真言ノ加持ノ法門ノ心マコトニ明ナリ。ヲノヅ
カラ深キ心アルベシ。加持ハ感応ノ異名也。加ハ応、持ハ感ナ
リ。

広本沙石集卷五

聖財集「此歌加持ノ法門ノ心ヲ自然ニヨメリ。」

いずれにも真言密教とのつながりが考えられる。雑談集卷十一「梵
字功德事」に述べられているような考え方も、和歌のことばについ
ての考えに投影するところがある。

永仁三年に記されたとされる野守鏡に、

すべて世間はことに仏法の肝心にて侍り。そのゆゑは人のここ

思ふ事などとふ人のなかるらんあふげば空に月ぞさやけき
和歌深秘抄

全文が既掲の沙石集の文にいちぢるしく似ており、そのまま慈鎮の言とは為しがたい。しかし、拾玉集にも、

それ大和詞と云ふは我が国のことわざとして盛んなるものなり。五七七七にて五つの句あり。五大五行を表するなるべし。(中略)限あれば真言の梵語こそ私の御口より出たる詞なれば仏道におもむかむ人は本意とも知るべけれ。漢字にも仮名つくる時は四十七言を出づることなし。梵語は却りて近く大和詞に同じといへり。(中略)天竺に云ふ梵語と同じところ申すめれ。我が国のことわざなれば唯歌の道にて仏道をも成りぬべし。云云

とあり、真言を重んずる和歌観は無住のそれに通ずる。また、「和歌を御心得なくは真言の大事は御心得候はじ。」と慈鎮をいましめたとし西行については、

西行法師、常ニ来テ物語シテ云ク。我歌ヲ誦ハ遙ニ尋常ニ異ナリ。華、郭公、月、雪、都テ万物ノ興ニ向テモ、凡所有相、皆是虚妄ナル事、眼ニ遮リ耳ニ漏リ。又説出ス所ノ言句ハ皆是真言ニ非ズヤ。(中略)此ノ歌即是如来ノ真ノ形体也。去バ一首説出テハ一体ノ仏像ヲ造ル思ヲナシ、一句ヲ思ヒ続ケテハ秘密ノ真言ヲ唱ルニ同ジ。我此歌ニヨリテ法ヲ得事アリ。妄リニ人此道ヲ学バ邪路ニ入ベシト云云。サテ説ケル。

山深クサコソ心ハカヨフトモスママテ哀ハシラン物カハ
喜海其座ノ末ニ在テ、聞及シママ注之。

明恵上人伝記

の話がある。撰集抄には「見るや如何にあだにも咲ける朝顔の花に

ろをたねとするによりて、心外無別の義をあらはす。又あだなるおもひをいひ、はかなきことをかざりて、まことの心をのぶるは、これ権実の二教、空仮中の三諦也。密教につきていはばよろづのものにつけて志あらはすは、事理俱密の心なるべし。又大義の体をわきまへ、やさしき言葉をととのへ、ふかき心をあらはすは、これ身口意の三密を成ずる所也。又近きをとはくよみ、遠きをちかくいひ、いまだ見ざる名所をも見たる様によむごとくなる風情は、これ密教不思議の秘術、無所不至の体也。(中略)しかのみならず真言は諸仏所説の肝心のことばをえらび、衆生化度の速疾の理をきはむるがゆゑに、草句すくなしといへども功能もともおほし。歌もまたそのことばおほしといへども、これをえらびすぐりて三十一字につづむる事、真言におなじくして其心ざしのまことをあらはす事は、やまとことのはにすぎたる物なく侍るに、云云

とあり、ここにも真言密教とのつながりが見られる。和歌観と真言密教との交渉は、無住の時代の流れではなかつたらうか。さらに、つぎの一文に眼をとめる。

既慈鎮和尚之御詞曰。一行禪師の大日経の疏にも、一切の詞みな陀羅尼といへり。仏若我國に出給はば、和国のことばをもて陀羅尼とし給ふべし。高野大師も阿字をはなれたる詞なし。阿字則顯密の根本なり。多羅尼は是天竺のことば也。日本の和歌通用す。されば大日経の三十一品も、をのづから三十一字にかたとれり。世間出世の道理を三十一字の中につつめて、衣裏の珠と心得ぬれば、神明仏陀の感応ことにあらはれて、往生の素懐をとげずと云事なし。

先だつ今朝の白露」の一首を示し、「是こそ法文よ。」と言つた僧の話もあるが、これらを見ると、和歌陀羅尼説を直接導き出す力となつた、和歌観と真言密教との交渉は無住以前に尋ねられよう。

(4) 禪的思惟

教禪一致思想を有していたにせよ、禪者であつた無住の禪的思惟は彼の和歌観にどのように影響してようか。無住の和歌陀羅尼説は教禪一致の禪風を考えずには理會しなうが、しかし彼の立言には禪的思惟の裏づけを考えさせるものがある。

諸法実相なり。色香中道なり。龜言軟語皆第一義に帰す。和歌何ぞ必ずしも簡みすてん。治生産業、悉く実相に背かず。何事か法の理に叶はざらん。そのかみ或山中に閑居して侍りし時、鹿のなく音を聞きて思ひつづけ侍りき。

たれかきく(きくやいかに)妻よふ鹿の声までも皆与実相不相違背と

沙石集卷五

「夫龜言軟語みな第一義に帰し、治生産業しかしながら実相にそむかず。」(沙石集序)「業即解脱ト云ヒテ善惡不二ノ謂ヲ覺リ顯シテ迷悟一跡ノ理ヲ覺リヌレバ一色一香中道ニ非ズト云フ事ナシ。」(婁鏡)、また円頓止観の文として「円頓者。初縁実相。造境即中。無不真実。鑿縁法界。一念法界。一色一香。無非中道。云云」(沙石集卷五)ともある。慈覺大師・舍利勝致に「一ツノ色一ツノ匂何レカ中道ニ背カム。龜キ詞軟キ詞併勝義ニ改メム。」、慈慧大師・註本賞讃に「可知心性外ナクテ万法皆是法海乃至一色一香モ不中道物ヲ無。」、真源撰順次往生講式に「龜言軟語皆帰第一義。散乱歌詠益爲解脱門哉。」とあるのを見れば、この種の立言は天台教学とのつながりにおいて考えられるべきであるが、無住にあ

つては禪者としての禪的思惟が、和歌と仏道との乖離についてのことさらな意識の放下に動いていることも考えられよう。

綺語の失を論ぜば、失は人の染汗の心に有り。聖教とても、名聞利養に用ふる時は、皆魔業となる。是人の失也。是によりて敬持の徳を失ふべからず。経を誦むも折あしきをば、成論の中には綺語となるといへり。

沙石集卷五

和歌陀羅尼説は、狂言綺語観の流れつくべき一の帰結であり、論そのものの持つ意義はさほど深くはない。思えば、狂言綺語観はつねに対象としての和歌の規定に即して展開したのであり、狂言綺語とみる立場から陀羅尼とみる立場まで、畢竟、対象規定の場を出でない。しかし、ここで無住が述べているのは創作主体の問題であり、こうした形で主体の心位を取り上げている点に禪的思惟の介入を考えるのである。創作主体の心位を重視するならば、敢て和歌の陀羅尼である所以に拘る要もあるまいと思われるが、その点については無住自身触れるところがない。この問題の展開は後に譲つて、和歌陀羅尼説の底辺における寛容な和歌認容を推定させる四の因として、この禪的思惟の介入を指摘するにとどめておく。

以上、「背景」と名づけて、和歌陀羅尼説がどのような諸因に根ざして成立したかを考えた。そして、和歌陀羅尼説は、真言密教の色濃い照射を受けている点に特色を見せながらも、狂言綺語観の流れつくべき一の帰結ではなかつたかと考えた。その点、従来の対象論的立場での和歌肯定から主体論的立場での和歌肯定に向つている点に問題を見出す。道意識の成熟につれて歌人も主体論的立場で和歌を考えるようにはなつたが、いまだ明確ではない。たとえば、詞

に對する心、その心に對象論的立場での心と主体論的立場での心とが種れあつてゐるように。無住自身、どれほど明確な主体論的立場の自覺があつたか疑わしい点もあるが、すくなくとも狂言綺語觀に關しては問題の所在を一步掘り下げたところがあると言えよう。

おわりに

和歌陀羅尼説は、「陀羅尼」という對象規定に即するかぎり、仏道への接清度はきわめて高い。そのことは、従來の狂言綺語觀に纏綿する氣分的な陶醉を剝離し、和歌と仏教との對決を余裕の無いものとする。既にのべたように無任にも寛容な和歌認容が存したのである。しかし、和歌陀羅尼説を繼承する限り、あるべき和歌の姿は仏教的規制のいちじるしい、方向づけられたものとならう。和歌陀羅尼説がいわゆる狂言綺語觀よりもはるかに滲透力を欠いていた所以もここに求められよう。和歌陀羅尼説の繼承としては、

本より歌道は吾が国の陀羅尼也。綺語を論ずる時は經論をよみ
稗定を修するもまうごうなるべし。 ささめぐと

殊に連歌は名聞りやうにあらず。大唐におきては經陀羅尼、吾
朝にては和歌とてもちはやす事なれば、仮にもあたにし給ふべ
からず。 馬上集

此道を仏法などより劣に思ひ給べからず。天竺にては陀羅尼梵
語を説、我朝には神明和光為化度和歌をのぶ。これ則此国の陀
羅尼なり。生死を悟り、仏神の感応、一代説教の理に毫発の勝
劣あるべからずと也。 岩橋

など、心敬の言説が注目される。その他、世鏡抄、長弁私案抄、耕

雲口伝、和歌無底抄、蹉陀山縁起、前參議教長卿集などにもその経承を見うるのである。

前稿（三つの夢）訂正

二八頁下段二十行 慈鎮が西行に——西行が慈鎮に

——広島大学皆実分校助教